

歴史

History

その多くが謎に包まれた
幻の古碗・合鹿碗

平成5年3月、旧柳田村が一冊の本を発行した。5年間にわたる調査結果の報告書『合鹿碗』。謎に包まれた合鹿碗の歴史をひもとく貴重な資料は、関係者の情熱によって誕生した。

「合鹿碗」の価値を村民に知ってもらい、歴史や分布を明らかにしよう。旧柳田村文化財保護審議会委員の原田正彰さん（故人）が村当局に呼び掛け、昭和63年から本格的な調査が開始された。

調査は原田さんをはじめ、荒川浩和さん（当時東京国立博物館名誉館員）、四柳嘉章さん（当時石川県輪島漆芸美術館客員教授）など漆器研究の第一人者や東京芸術大学の大学院生らがあつた。

調査で村民の聞き書きを担当し、約200軒の家を回った瀬戸久男さん（71）＝石井＝によると「当時、合鹿碗は幻の古碗として人気を集め、多くの古美術商が合鹿碗を求めて村内に入っていた」という。

合鹿碗類として村の文化財に指定されながら、次々と村外に売られていく合鹿

合鹿碗

GOU-ROKU-WAN

合鹿地区を中心に生産され、百年以上に途絶えた漆器「合鹿碗（ごうろくわん）」。

その造形と黒漆の素朴さ、力強さ、美しさは、時代を超えて人々を魅了し続けている。

先人が残した貴重な財産をどう生かすか。その価値と可能性は限りなく大きい。



荒川浩和監修『合鹿碗』（発行 / 柳田村）

碗。瀬戸さんは「合鹿碗を『猫の御器碗』と呼んで猫のエサやりに使ったり、底に穴を開けて使っている家もあった」と振り返る。

年代と形から8期に分類

『合鹿碗』を監修した荒川さんは、合鹿碗を1期から8期までに分類。その系譜をさまざまな角度から検証している。

合鹿碗がいつごろから生産されていたかは謎のままだ。文献で最も古いものは元禄7年（1694年）。現存する合鹿碗も元禄年間と分析されている。

漆の技法は柿渋を下地として使う平安時代末期の技法を継承していることが分かったが、分析を担当した四柳さんによると、現在の調査では中世にまでさかのぼることはできないということだ。年代を特定する新たな発見が待たれている。

平成19年、五郎左工門分で室町時代の遺跡が発見された。四柳さんの分析の結果、発掘された漆塗りの杓子は合鹿碗と同じ技法であることが判明。元禄以前にも、渋下地の漆器が作られていた。

合鹿碗最後の木地師とされる本谷三郎右衛門（昭和5年没）が使っていた縄掛轆轤は福正寺に現存している。妻が縄を引いて轆轤を回し、木地師が木地を挽いていたという。夫婦が協力しながら作りあげた合鹿碗。見る者を引きつけるその魅力は、きつと一つではない。

福正寺

Temple of Gourokuwan

能州木地師が建てた 合鹿碗ゆかりの寺

合鹿碗発祥の地に、合鹿碗を生み出した木地師たちによって建てられた福正寺。その由来や「合鹿碗の寺」としての思いなどを飯山正悟住職に聞いた。



1



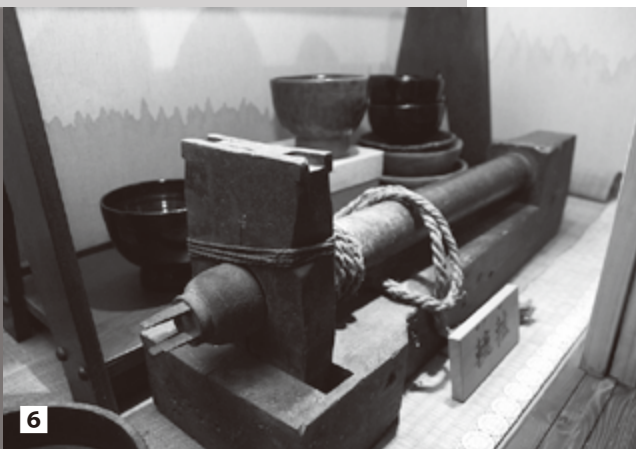
2



3



4



6



5

合鹿

こうるくという地域がどのように誕生したか。能登鹿がいたからという説。山の麓（ふもと）が合わさった地域という説。轆轤師（ろくろし）が集まったからという説などいろいろと推測することができ、が、麓や轆には鹿の字が使われています。

夏場に山で仕事をした木地師たちが、冬に過ごす小屋を山の麓であり交通の要所であったこの地に構え、炭焼きなど冬の仕事をしたのではないのでしょうか。

木地師たちは自分たちで木地を作り、漆を塗って、売りに行きました。遠いところでは金石（金沢市）まで行商にいったそうです。そこで蓮如上人のお説教を聞き、感動した木地師たちが「町野郷総道場」として建てた寺が福正寺です。本堂は今から約500年前に木地師たちが中心となって建築されました。その彫刻は木地師たちが彫ったもので、町の文化財にも指定されています。

蓮如上人の教えに「3人集まったら講をつくれ」というものがあります。講というのは、みんなで食べ物を持ち寄ってみんなで料理をして語り合うことが始まります。普段はアワやキビを食べていたけれども、月に2回と春秋の彼岸は、お寺のお参りとして集まり、白いご飯を山盛りにして食べていました。

ご飯を炊いて食べる食文化には碗が必要で、合鹿碗が必要に応じて生まれたもののです。土間やムシロの上でも

ない」と話していたのを思い出します。

福正寺が「合鹿碗の寺」として知られるようになると、多くの人が合鹿碗を見せてほしいと訪ねるようになりました。現在は、屋根裏を改修して寺で所有する合鹿碗の一部を展示しています。訪れるのは、特に外国人や漆器職人が多いです。

町の誇りとして生かしてほしい

わたしが柳田村の教育長をしていた時に「合鹿碗」の商標を登録する話が出ました。最終的に村が登録し管理することになりましたが、残念ながら許可を受けていない合鹿碗の模倣品が日本中で売られているという現状です。

合鹿碗は町の誇りです。地元の人にもっとその価値を知ってほしいし、行政には登録商標の管理をしつかりとして、作り手を支援し、町を挙げて地場産業にまで高めてほしいと思っています。



飯山正悟 住職

しっかりと置けるように高台を高く作ったともいわれています。現在も講のときに寺で使っている碗は、合鹿碗を輪島で塗り直したものです。

明治時代まで作られていた合鹿碗ですが、ほかの漆器や陶磁器などに押されて職人がほとんどいなくなり、幻の碗になってしまいました。

角偉三郎と福正寺

昭和27年に日本民俗学会や日本考古学会をはじめとする九学会が能登総合調査を行いました。このとき、珠洲焼や合鹿碗というものが初めて世間に知られることになったのです。

それ以降、合鹿碗を作りたいという作家も出てきました。輪島の漆工芸家、角偉三郎さん（2005年没）もその一人です。角さんの作品は世界的に有名になりましたが、合鹿碗を作り始めて最初の個展を開いたのが福正寺でした。制作に行き詰まると「合鹿碗を見せてくれ」とよく寺を訪れ、創作意欲をかき立てていました。「合鹿の寺に足に向けて寝られ

蘇る合鹿碗

Renaissance of Gourukwan

ふるくてあたらしい。
合鹿碗の復元、そして復興へ。

「自分の合鹿碗ではなく、昔の人が作ったやり方で合鹿碗を復元したい」。合鹿碗との出会いから24年。一人の作家が「合鹿碗の復元・復興」という夢に向かって歩き出した。

木彫作家としての苦悩と
合鹿碗との出会い

2009年11月、福正寺の一室に真新しい合鹿碗が並べられた。柿渋や炭粉を使う合鹿碗の特徴ある漆の塗り方を再現し、昔ながらの方法で復元された合鹿碗。その制作者が24年前に珠洲市から旧柳田村に移住した木彫作家・大宮静時さんだ。「一生できる仕事として木彫を選んだ」という大宮さんは、高校卒業と同時に富山県井波彫刻の日展参与、横山一夢氏の工房に弟子入り。6年間の修行を経て古

里である珠洲市に工房を開設した。

木彫作家として、キリコの彫り物や欄間などのほか、オブジェのような抽象的作品を制作していた大宮さん。しかし「木彫刻を生活の中に取り入れたい。『人肌に近い』作品をどういう形で表現すればいいのか」という思いがあったという。

86年、大宮さんは工房を旧柳田村に移す。そこで待ち受けた古い合鹿碗との運命的な出会い。その感動が大宮さんの心を動かしした。

「初めて見た合鹿碗の力強さ、美しさに感動した。この時、器の持っている力近で見えてきた一人。復興を支えた陶工は友人でもある。

「自分が始めることで、後に続く人が出てくるかもしれない。理想は合鹿碗が能登町の特産品となり、新たな産業となること。復元はその第一歩」

試作品を手に、町が保有する『合鹿碗』登録商標の使用を申請し許可を得た。町から依頼され『合鹿碗の定義』も決めた。

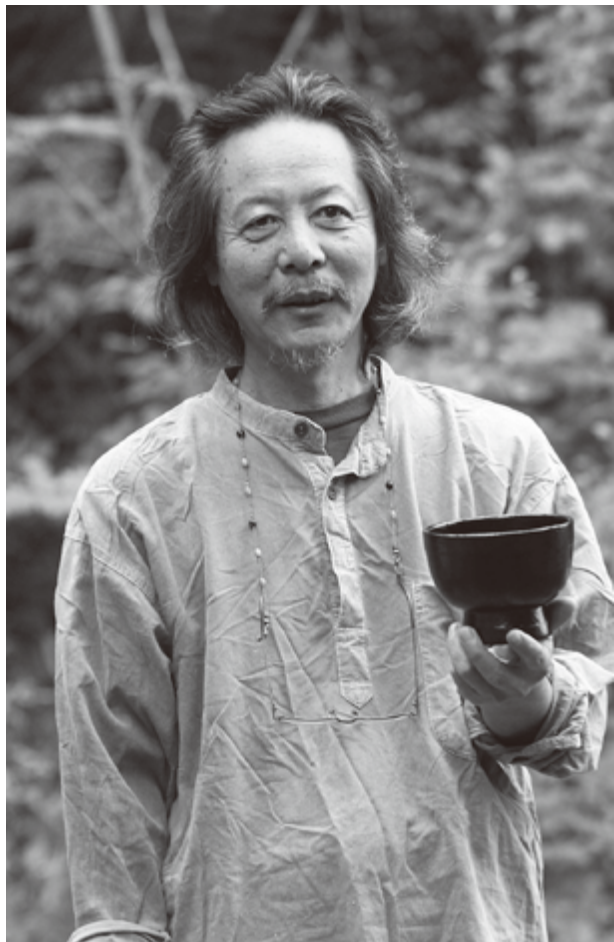
「古い合鹿碗は100年以上の年月が独特の変化を加え、現代に輝いている。復元はレプリカではなく、昔の人が作ったように作ること。『古くて新しい』合鹿碗を復元していきたい」

復元から復興へ。合鹿碗を蘇らせた木彫作家の夢は、これからが本番だ。

んも独自のアプローチで「大宮静時の合鹿碗」を制作。東京や福岡など全国各地での個展を重ねていた。

02年には、ロンドンの中心地、ジャーミンストリートで日本人として初めて個展を開催。個展を機にロンドンの一流レストランでの採用やドイツのデザイン誌に掲載されるなど、大宮さんの作品は世界でも高く評価された。

「合鹿碗は世界でも知名度が高い。輪島塗など漆器全体ではなく、単体の『碗』として世界に知られているものは合鹿碗だけではないか」と分析する大宮さん。「かつて木地師の里であったこの地から世界に通用する合鹿碗が生まれた。これは地域の貴重な財産になる」と訴える。



合鹿碗を復元した木彫刻・漆作家

大宮 静時 さん
Seiji Oomiya

【PROFILE】

1955年珠洲市生まれ。富山県井波町（現南砺市）の木彫工芸家・横山一夢氏に師事。79年珠洲市で工房を開設。能登最大のキリコである「寺家のキリコ」の彫り物などを手掛ける。86年柳田村（現能登町）に移住。合鹿碗と出会う。06年、3年を費やし一人で建築した工房・住居（十郎原）に引っ越し。09年に合鹿碗を復元。能登町所有の「合鹿碗」登録商標使用許可を得る。02年ロンドン個展、09年福正寺で合鹿碗復元展、10年「しいのき迎賓館」開館記念展。ほか毎年東京・福岡・函館・金沢など全国各地で個展を開催。

旧石川県庁をリニューアルした「しいのき迎賓館」の開館記念展示会「能登と加賀の技展 合鹿碗の復元 大宮静時作品展（5月16日～30日）」。ギャラリーには復元された合鹿碗50個がずらりと並んだ。来場者は約5500人。多くの人が入場と同時に驚きの声を上げたという。





昔の木地師の精神をくみ取り、
自分が感動したあの合鹿碗に
たどり着きたい。

復元の技

Technique of Restoration



【右頁】復元合鹿碗に漆を塗る大宮静時さん。塗りの課程は①木地に柿渋を3回塗る②口縁部に布着せ③下地（炭粉渋下地）を塗る④研ぐ⑤漆を塗る（4回）⑥研ぐ⑦漆を塗る（仕上げ具合によって数回）

【上】漆を塗るハケは人毛。

【左上】漆塗りは独学。古い合鹿碗のようにハケの毛やゴミがついてもその器の味になるという。

【左下】復元した合鹿碗につける印は、「開かれた宇宙」を意味する物理記号。合鹿碗が多くの世界に広がってほしいという大宮さんの願いが込められている。



大宮さんが決めた定義の一つが「^{ろくろび}轆轤挽き」。現在は轆轤の設備がないため、輪島の木地屋・高田晴之さん（42）に外注している。

【下】轆轤で木地を挽く高田さん。大宮さんの指示で細かい微調整が続く。【右】原木を粗く削り熏煙乾燥させてから轆轤へ。輪島では数少ない「山中式轆轤」を使用。

【中】轆轤挽きに使われるカンナと呼ばれる道具。



合鹿碗はあこがれ
その本質に近づきたい。

木地屋
高田晴之

唯一の価値

Gourokuwan is only one

漆研究の第一人者が語る 合鹿碗の価値と可能性

漆の研究に科学的調査を取り入れ、「漆器考古学」を提唱する四柳嘉章さん。親子二代にわたる合鹿碗の調査・研究は、合鹿碗唯一の価値を見いだしている。

合 鹿碗は素朴で包み込むような温かさがあるとして、古美術界で根強い人気を保っていますが、漆文化から見る合鹿碗の特徴は大きく二つあります。

一つは、漆の技法が平安時代末期に出現した渋下地漆器という伝統技法を受け継ぐものであること。二つ目は、木地屋の仕事が分業化する以前の生産形態、つまり木地屋が木地から塗りまでを一貫して生産していたことです。

昭和27年、民俗学者だった父が九学会の調査で合鹿の木地屋に聞き取り調査を行いました。木地や塗りの工程、輪島との関係など、今では絶対に聞くことがで

きない貴重な調査結果でした。

この時、合鹿碗が下地に柿渋を使う廉価版の渋下地漆器であること、輪島塗の特徴の一つである布着せを行っていることが分かりました。40年後の調査でわたしが科学的分析を行い、それを裏付けましたが、中世の漆器を見ても普及品である渋下地の漆器で布着せが行われている例はなく、合鹿碗だけの特徴と言うことができます。

布着せは輪島塗の影響と考えられます。聞き取り調査でも、輪島と嫁のやりとりや木地を作ってやったりもらったりするなど密接な関係が分かっています。

合鹿碗が近世輪島塗の祖型とする説もありましたが、二つは技法的にまったく異なるものです。木地が本質である合鹿碗と塗りが本質の輪島塗は、ある意味で対極の漆器と言えます。お互いに交流、影響し合いながら、結果的に合鹿碗木地屋の高い技術が輪島塗に受け継がれたと考えられます。

り、あの底つやのある美しさは化学合成塗料で出すことはできません。さらに合鹿碗には日常雑器こそ奇をてらわない素朴さがあり、木地屋の精神、木の魂が飛び込んでくるような器です。まさに能登人のおおらかさと素朴さを体現した器なのだと思います。

な ぜ合鹿碗は人を引きつけるのでしょうか。わたしはそこに作り手の精神性が存在するからだと思っています。

漆は縄文時代から使われてきましたが、作るには大変複雑な工程と精神的な行為が必要です。東南アジアで今も漆の採取や製作時に神を降ろすように、縄文人も古代、中世の日本人も同じように神に祈っていたでしょう。

漆は神が介在する精神性の塗料であ

能 登町にとって、柳田村から受け継いだ貴重な文化遺産を未来にどう生かすかが大きな課題だと思います。

合鹿碗復興のために①里山にウルシや渋柿の木を植える②昔ながらの技法を体験できる工房や資料館を作る③作家を育てる④情報を発信する―など行政でしかできないことがたくさんあります。

このまま埋もれさせることは地域の損失です。合鹿碗には復興させる価値と復興できる可能性が十分にあるのです。



石川県輪島漆芸美術館 館長
漆器文化財科学研究所 所長
歴史学博士

四柳 嘉章さん
Kasho Yotsuyanagi



柳田教養文化館には、資料『合鹿碗』に掲載された貴重な合鹿碗約30点が常設展示されています。

【所在地】能登町柳田礼部8番1地（柳田小学校すぐ近く）

【開館時間】10:30-18:30

【休館日】日・月曜日、国民の祝日、年末年始、図書整理期間

☎ 76-1585

柳田教養文化館

合鹿碗常設展示

器が変われば料理が変わる。
生活の中で使われてこそ合鹿碗は輝きを増す。